

Title	音楽を通して学んだこと
Sub Title	
Author	千住, 真理子(Senju, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2004
Jtitle	人間教育講座： 社会を知る自分を知る自分を育てる (2004.) ,p.117- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20040000-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三 音楽を通して学んだこと

バイオリニスト
千住真理子



一九六二年生まれ。東京都出身。二歳半よりバイオリンを学び、小学五年生のとき全日本学生音楽コンクールで優勝。一九七五年、十二歳でNHK交響楽団と共演しプロデビュー。十五歳で日本音楽コンクールで最年少優勝、レウカディア賞受賞。八一年にバガニーニ国際コンクールに最年少入賞する。慶應義塾大学卒業後、国内外での活躍はもちろん、文化大使派遣演奏会としてブラジル、チリ、ウルグアイ等で演奏、チャリティーコンサートなど社会活動にも関心を寄せる。九三年文化庁「芸術作品賞」、九四年度村松賞、九五年モービル音楽賞奨励賞各賞受賞。二〇〇二年「幻の名器」とされるストラディヴァリ「デュランティ」と出会う。〇四年にはデビュー三十周年を迎え、マリンスキー歌劇場管弦楽団やベルリン室内管弦楽団などとの共演を予定している。

（壇上にバイオリンケースを持って登場）皆さん、こんばんは。今日は演奏会から回って来ましたので、楽器を持っています。今日は皆さんにお話をするということで、演奏会ではないのですが、せっかくバイオリンが手元にあるので、一曲くらい弾こうかなと思っております（会場から大拍手）。

私自身も、一曲くらい弾かないと、どうも調子が乗らないんですね（笑）。何かリクエストありますか？ 弾けるものなら弾きます（会場から「愛のあいさつ」をというリクエストあり）。では、「愛のあいさつ」を弾きましょう。これはエルガーの作曲ですね。

「愛のあいさつ」演奏（拍手）

ありがとうございます。

慶應義塾大学理工学部は私の父がずっと教鞭を取っていた場所です。その父は四年前に亡くなってしまいましたが、私は今日、この場所にとっても嬉しい気持ちで来ています。理工学部の皆さんに私のお話を聞いていただくだけでなく、音楽も少しですが、聞いていただけたので、本当に嬉しく思います。私自身も慶應で育ち、慶應でいろいろなことを学んだひとりです。皆さんの先輩にはなりますが、皆さんと同じ目線で物事を考えたり、話したりすることができればいいなと思っています。

十二歳の早すぎるプロデビュー

会場からのリクエストにお応えして演奏したのは、エルガーの「愛のあいさつ」です。

クラシック音楽というのは、ご存じのように、マイクを一切使わないで演奏するんですね。そういう意味では、他のジャンルの音楽とは非常に違って、空気の振動をそのままからだと受けて、音楽を聴きます。しかも、いまから三百〜四百年前からまったく同じ方法で演奏されているんです。バイオリンに張ってある弦は羊の腸（カッタ弦）でできていて、ポー（弓）に張ってある毛は馬の尻尾の毛で、しかも白馬の尻尾の毛と決まっています。この白馬の尻尾の毛に松葉のヤニをこすりつけて、羊の腸をひっかけて、音を出すわけです。こういう非常に原始的な方法を今も昔と変わらずにやっていて、しかもそれがこのいまの時代に受け入れられていて、世界中の非常に多くの方々に愛されている。そういう意味でも、クラシック音楽の根本的なすばらしさは今も昔も変わらなくあるのではないかと思えます。

そのクラシック音楽を私が始めたのは二歳三カ月のときで、まだぐにゃぐにゃの幼児でした。そしてクラシック業界にプロデビューしたのが十二歳です。この十二歳、小学校六年生という年齢は、クラシックの世界ではあまりに若すぎる年齢だと思います。あまりに若すぎる年齢でデビューしてしまったために、私はその後、いろいろな事件に遭い、さまざまな経験をしまし

た。そのなかの一部分を、今日は皆さんにお話できればいいなと思っています。私の音楽を聴いてくださる方のなかには、千住真理子はこれまで非常に順風満帆で来たのだらうとご覧になっている方も多いと思いますが、実はそうではありません。ですから、今日は私自身の挫折について、お話をしたいと思います。

天才少女の苦悩と挫折

いまお話したように、私がプロデビューしたのは十二歳でした。そしてデビューしてすぐに、マスコミに「天才少女」と呼ばれました。始めは何となく嬉しかったのですが、そのうちに「天才少女」という言葉がだんだんと重荷になってきました。

当時、私のバイオリンの先生は江藤俊哉先生というとても著名なバイオリニストでして、その江藤先生がこう言うんです。「あなたは天才少女と言われるのだから、天才らしい弾き方をしなさい」。この「天才らしい弾き方」とはどういう弾き方かというと、たとえば「きわめて早く」(presto)と書いてある場所なら、これまで人が弾いたことがないほど早く弾いてみるなど、聴衆をわっと驚かせて拍手をもらう弾き方です。そういう天才的な弾き方ができることが、その当時言われていた天才少女の条件のひとつでした。

私はこの期待に何とか応えようと、慶應の中等部、女子高時代とずっと必死に練習していました。学校に通いながら、学校のあるときは四、五時間、学校がないときには、一日十二時間から十四時間練習しました。なぜ十二丁十四時間も練習するのかと言いますと、そのぐらい練習しないと、いわゆる「天才弾き」というスタイルをキープできないんですね。

たとえばステージに上がったときに、ちょっとでも体調が悪かったりすると、ミスをしたりします。そうすると、「あれ、天才のくせに、あんなになっちゃって……」と、すぐに言われるんですね。ところが、非常に調子よく上手に弾けたときにはだれも誉めてくれない。天才だからうまく弾けて当然なんです。そういうようなことで、私にとって「天才少女」というハードルがだんだんと高くなってきました。

学校に通いながら、一方で練習を一日に十数時間もしなければならぬ。そういう状態のなかで、私のからだはだんだんとおかしくなってきました。たとえば、一日十数時間も練習をすると、夜寝るときにはもう腕から指先まで痛くて、がたがたなんです。もちろん背骨も痛くて、からだ中の節々があまりに痛くて、眠れないんですね。病院の先生から痛み止めをもらって飲んだり、からだ中にくさい湿布を貼って寝るんですが、それでも痛くて眠れない。毎晩母にからだ中をマッサージしてもらっても、眠れませんでした。

そういう状態でしたが、それでも毎日練習しないと、その「天才弾き」がキープできない。

また、新聞や雑誌は相変わらず私のことを「天才少女」と書いてくださっていたわけで、そうした世間のフィーバー、あるいはそういった方向性と、自分自身の演奏を同一のベクトル上にもっていくためには、相当の無理をしなければなりませんでした。

そしてついには、私自身がだんだんと精神的に追いつめられていきました。女子高の二年生ぐらいのときでしょうか。バイオリンを弾くことは非常に好きなのですが、毎日の訓練のあまりの厳しさと辛さに「もう、私の人生、早く終わらないかな」と思っただんですね。「早く死んでしまったらいいんじゃないか」と思うぐらいに、本当に追いつめられていた自分をいまでもよく覚えています。

手塚治虫氏との出会いと大学進学

そういう状態ですから、一日にたとえば十二時間練習していても、十四時間練習していても、ステージに上がるとだんだん弾けなくなってきたんですね。ステージの上に出ると、「あれ、今日は弾けない」となってしまう。つまり、いくら長時間練習したとしても、からだや気持ちのコンディションが整わないと、ステージ上で演奏に集中できないんですね。何となく疲れがたまっ、頭がぼーっとしていると、肝心の演奏に支障をきたすわけです。そういう状態が続

くと、だんだんと悪循環になってきます。練習すればするほど、だんだんめっちゃくちゃな演奏になってきたんですね。それが女子高のときです。

その当時、音楽の評論家の先生方に、「千住真理子はだんだんダメになってきたのではないか」と書かれるようになりました。当時私は「天才弾き」ばかりをしていましたので、音楽というものはこんなに辛いものかということしか考えていませんでした。私にとっては、音楽イコール感動ではなくて、音楽イコール、たとえば人を驚かせたりするというスポーツ的なことであって、感動と音楽がどうやったら結びつくのか、まったくわからなかったのです。

しかし、その頃、ひとつの出会いがありました。いまはお亡くなりになった、アニメーションの大家である手塚治虫先生にお会いしました。私に映画『火の鳥2772』の音楽を担当してくれということで、当時十七歳の私は手塚先生その映画の音楽を担当することになりました。その作業のなかで、私は手塚先生に相談したんですね。「先生、私はもう苦しくて、バイオリニストを続けていけないかもしれない」と。すると手塚先生は「あなたはせっかく慶應にいらんだから、勉強しなさい。僕はマンガ家だけどマンガばかり描いてはいない。医学の勉強をしている。世の中は医学の勉強とアニメーションとがどうしてつながるのか、と言っけれども、実はこれは非常に大切なんだ。この両者を勉強することによって、片方を勉強していると、もう片方のヒントが生まれる。もう片方を勉強していると、もう片方のヒントが生まれる。もう片方のヒントが生まれる。もう片方のヒントが生まれる。もう片方のヒントが生まれる。」

「やっただんだん両方が上に昇っていくことができるんだ。片方だけでは非常に難しいんだ」と、おっしゃったんですね。それで私は何か迷いがふっきれて、「バイオリンばかりを一日に十二時間も十四時間も弾いていることはいつでもできるけれど、勉強したいと思って、講義を聞くチャンスはなかなかない。よし、じゃあ、慶應義塾大学に進もう！」と決心したわけです。

「ご存じのように、クラシック音楽というのは、本当につきつめると芸術ですね。もちろん百点満点という芸術はないわけで、その人間が勉強すれば勉強するほど、その芸術が変貌していったり、色合いが変わったりと、いろいろな変化が生じるわけです。その芸術家そのものの人間性が、その作品を、あるときは非常に個性的にしたり、あるときには非常に刺激的なものにしたりするのだと思うんですね。そういう意味から、自分の人間性を深めるためにも、慶應大学へ進学することを最終的に決めました。」

バイオリニストをやめる

慶應義塾大学に入り、勉強しているうちに、私のなかにある思いが生まれてきました。十九歳から二十歳になる頃のことです。世間からは「天才弾き」を未だに要求されていて、ステージに立つと、そういう演奏を続けていました。でも一方で、大学でさまざまな分野の先生方の講

義を聞いていると、そのお話が私のいろいろな部分を刺激するんですね。そうするうちに、音楽でももっともつと違う、「天才弾き」ではない、感動できる音楽があるんじゃないかと、ふと思うようになってきたんです。

そしてついに、「天才弾き」を要求されるバイオリニストであることを、私はもうやめようと思うようになりました。もし「天才弾き」をそのまま一生続けていかなければいけないのであれば、私自身が破滅してしまうかもしれない。そう思って、私は二十歳のときに、バイオリニストであることをやめました。これは「中止」ではなく、「休養」でもなく、本当に一生やめようという結論だったわけです。

ところが、バイオリニストをやめることは、思ったよりも簡単ではありませんでした。と言うよりも、バイオリニストをやめたことで、どうしたらいいのかわからなくなった自分が生まれてきてしまったんです。なにしろ、私は二歳三カ月のときにバイオリンを手にしてから、小学校、中学・高校とずっと音楽と切り離せない生活をしてきていたわけです。お休みのときには十二時間以上も練習して、夜寝るときにも音楽のことばかり考えながら生きていた。私の人生はいわばすべて音楽だったわけですね。毎日朝起きると、ふつと音楽のことを考えてしまつ。「あつ、もうバイオリニストじゃないんだ。音楽のことを考えなくてもいいんだ」。そう思ったときに、心に大きな穴がぼっかり空いて、何をしたらいいのかわからなくなってしまいました。

それならば、それまでやりたかったことをやるうと考えました。友だちと一緒にシヨッピン
グにも行きたかった。友だちともっと遊びたかった。仲のいい友だちに電話をして、親
に怒られるぐらいの長電話をしたかった。スポーツもいろいろとしたかった。そういうたこと
を全部やってみようと思って、二十歳になった頃にはいろいろなことをやってみました。スキ
ーやスケートに行ったり、テニスをしたり、みんな友だちに教えてもらいながらやりました。

でも、何をやってもバイオリンのことを思い出してしまうんです。たとえばスキーを滑
っていて、友だちに「体重のかけ方はこうよ」と言われて、体重を右にかけたり、左にかけ
たりしていますと、「あっ、これはバイオリンに通じるものがある。バイオリン演奏でも、こ
ういうふうには左の足から右の足に体重を置き換えると、強い音が出るな」というようなことを
またふっと思っちゃうんですね。そして、「もうバイオリンは関係ないんだ」と思うと、空しさ
がだんだんと心にしみてくる。

友だちと一緒に街を歩いていても同様です。街を歩いていると、意外とクラシック音楽が鳴
っているんですね。喫茶店に入っても、クラシック音楽が流れています。そのクラシック音楽
を聴くと、気持ちが悪くなるようになってしまったんです。そしてあるとき、クラシック音楽
が流れている喫茶店で友だちと話している間に、私は気分が悪くなって倒れてしまいました。

それからおよそ一カ月、私は点滴を打って寝たきりのような状態になりました。音楽のこと

を考えると、気持ちが悪くなる。しかし音楽のこと以外は頭に浮かんで来ないんですね。本当にこれで生きていけるのかなと思うような状態になって、一カ月間寝ていたそうです。私自身はそのときの記憶がないのでわかりませんが、何か泣きわめいたような状態で寝ていたそうです。

ホスピス患者の最後の願い

倒れてから一カ月以上過ぎて、具合も多少良くなって、家でぼーっとしていましたが、一本の電話がかかってきました。それはホスピスからの電話でした。

皆さんもご存じのように、このホスピスというのは、末期ガンなど余命いくばくもない、そして自分自身も自分の残された人生があとどのくらいかがおおよそわかっている方が、最後の残された人生をあるひとつの限られた施設で過ごす、そういう場所です。そのホスピスの患者さんのお知り合いの方から、私のところに電話がかかってきたのです。

そのお知り合いの方がおっしゃるには、「千住真理子のファンだという人が、いま、患者としてホスピスにいます。もういつ亡くなってもおかしくない状態ですが、最後に千住真理子に会いたいとおっしゃっているのですが……。」というお話でした。私はそのとき即座に答えまし

た。「私はバイオリニストをやめましたので、お会いすることはできないと思います」。

そう答えましたら、相手の方が「いえいえ、バイオリニストとしてお願いしているわけじゃないんです。私たちはホスピスの患者さんの最後の夢をひとつだけ叶えてあげようということと動いているボランティア団体です。そのなかのひとりの患者さんの夢が最後に千住真理子に会いたいというものなんです。その夢を自分たちは叶えてあげたいだけです。あなたはど
う思いますか？」とおっしゃいました。そう言われて、私は非常に恥ずかしい思いをしました。
この期に及んで、バイオリニストであることをひきずっていたなど。非常に反省して、即座に
私はその申し出に応えることにしました。

私は、何気なくバイオリンを抱えて、その患者さんのもとを訪れました。末期ガンの方でしたから、もう本当からだ中痩せ細っていらっちゃって、その力無い手で私の手を握って握手をなさいました。「来てくれてありがとう」と言ってくださったので、私は喜んでバイオリンを弾いてあげようと思いました。

ところが、そのときは、私が最後にバイオリンケースを開けてからすでに一年以上も経っていたんですね。でも「弾いてあげたい」という気持ちが強くなったので、私はバイオリンケースを一年ぶりにその人の前で開けて、バイオリンを弾きました。弾いたのはパツハの「G線上のアリア」です。ところが弾けないんですね。楽器をなさったり、スポーツをなさったりする

方ならもちろんおわかりだと思いますが、一日弾かないと自分でわかってしまっし、三日弾かないと、皆さんにわかるぐらいに腕は落ちるんです。一年も弾かないと、もう本当にどうしようもなく弾けなくなるんです。ポーもきちんとしていられなくて、もう、ガタガタガタガタいっている。音程もちゃんと取れないし、とにかく全然弾けなかつたわけです。

自分自身は「こんなに弾けないなんて、本当に情けない」と思いながら、楽器をケースにしまっていると、その患者さんが「どうもありがとう。私は本当に苦しかつたけれど、生きていて良かったと思う」というようなことをおっしゃって、目に涙をためて、私にもう一度握手を求めてきました。そしてこんな話をしてくださつたんですね。「ガンは本当に苦しくて痛いんですよ。どんなに薬を打つても、ますます気持ち悪くなるし、苦しいし痛い。なぜ生きているんだらうと毎日思う。でも今日は大好きな音楽を聴けて、それもずっと夢だつた千住真理子の音を目の前で聴けて、私はいまこの瞬間、生きていて良かったと思つたんですよ。ありがとう」。

そうおっしゃってくださったときに、私は嬉しいなんて思えただけありません。「本当に何というひどいことをしてしまつたんだらう。私の人生のなかで最悪のことをしてしまつた」と思いました。「それまで私は毎日十二時間でも練習することを惜しまなかつた。それなのに丸一年間何も弾かないでいて、この人の一番大切な最期の、濃厚なほんのわずかな時間を、私の一番最悪な演奏で汚してしまつた」。そう思つて、ものすごく後悔して、私自身もとても心

が傷つきました。

そしてそのときに「家に帰ったら練習しよう」と思ったんですね。それはバイオリニストにもう一度なるうということではありませんでした。もしももう一度そういう患者さんが、あるいはだれかひとりでも私の音を聴きたいと言ってくれる人がいたら、その人のためにいつでも最高の演奏ができるように練習したいということです。それはプロになりたいという意味ではなかったのですが、いまから思うと、それが実は、再びバイオリンを手にしてステージに立つ第一歩になっていたわけです。

その日以降、私は毎日練習するようになりましたが、そのホスピスの患者さんはそれから一週間後に亡くなってしまいました。そのことを聞いたときに、私は「いつか私の『この演奏を聴いてほしい！』という演奏を、いまはもう亡くなったその人に聞いてほしい」という気持ちを込めながら、ホスピスに行こうと思ったんですね。それが私にとって、ボランティア活動の第一歩でした。

私は、いま、演奏活動の合間を縫って、月に一回ぐらいボランティアをやっています。たとえば九州で演奏会があると、九州で老人ホームやホスピス、孤児院に行ったり、あるいは身障者施設に行ったりするわけです。こういう形でボランティアをやっておりますが、実は自分の後悔の気持ちをまだ穴埋めできないような、そんな気持ちでやっているんです。やってもやっ

ても、まだ自分で申し訳ないという気持ちがあぐいきれなくて、いまもボランティア活動をずっと続けています。もしも、そのホスピスの患者さんにいまの私の演奏を聴いてもらえれば、私自身どんなに嬉しいかと思っっているのですが……。

音楽の研究

そんなふうにして、二十二歳で再びバイオリンを手にしたわけですが、本当に苦しかったのはそれからでした。それはそのときに「今度こそ、本当に人の心に響く演奏をしたい」と思ったからです。

大学の卒業論では「音楽 その方法」をテーマにしました。「方法論の分析による演奏の可能性」、つまりどついでついでに弾いたら、聴いている人にはどういふふうに分かるのだからかということ。それまでは、音楽とは、たとえばバイオリンをただ譜面通りに弾いて、それで終わりではないだろうかと思っっていたんですね。でもひょっとしたらそうではないのかもしれない。当時の私の疑問は、「演奏家が嬉しいという気持ちをもって弾くと、皆さんに嬉しいという気持ちで本当に伝わるのだからか。どうやったら人が感動するのだから。本当に人は感動するのだから」ということでした。そのことを何とか科学的に分析したくて、研究をしま

した。

NHKの技術研究所の大串先生という方に教えていただきながら、約百人の被験者の方を対象に実験を進めました。その方法はと言うと、私がテーマを隠し持つて、あるメロディーをそれぞれ十通りの弾き方で弾くんですね。その十通りの弾き方やテーマは被験者の方々には教えません。ただ演奏を聴いてもらって、それぞれどう感じたかを、チェックシートにチェックしてもらって、最終的にMBSというグラフにするわけです。

その実験でわかったことは、自分がテーマとしたことが伝わったのではなく、自分の深層心理が伝わっているということでした。たとえば「嬉しい」というテーマで弾いていても、そのときに弾き手である私が何だかイライラしていたら、そのイライラしたものが聞き手に伝わっている。それがグラフによってわかったわけです。その実験結果から、私は「音楽はもしかしたら非常に複雑ですごくおもしろいものじゃないかな」と感じるようになりました。

大学でそういうふうなことを勉強した後、今度は東京大学の生産技術研究所でさらに研究を続けました。今度は音響の研究です。ステージの上でどういふふうに弾くと、聴衆にはどういふふうに聞こえるのだろうかということですね。つまり自分で聞こえている音響と、皆さんが聞こえている音響の間にはどのくらいの差があるのだろうか。その結果によっては、私の音楽の作り方も変わっていくわけです。つまり、私がものすごいスピードで音楽を早く弾いている

のが、皆さんにはただモヤモヤっと聞こえては、意味がないわけですね。細かい音（音）が一言ずつ正確に皆さんに伝わっていなければ、意味がないんです。それがどのくらいの時差があつて伝わっているのかということの研究し始めました。この研究はまだ途中ですが、そうした研究を通して、私は、音楽というものは非常に奥深いものじゃないかと思つようになつたわけです。

ブランク後の弾けない日々

音楽に対して大きな希望を持ちながら、私は大学を卒業しました。そして再び演奏活動を始めましたが、ご存じのように二年間も演奏活動をやめていたわけです。二年間やめると、当然バイオリンの腕はすぐには元には戻らないんですね。当時、演奏会は年間に五十回ほどありました。その五十回毎回、ステージに出て行くと、必ずからだ中がガタガタ震えまして、頭の中はもう真っ白になつて、弾けないんです。あるいは曲の途中までは弾けても、途中でパツとわからなくなつて、演奏をやめてしまふんです。そうすると、聴衆はざわざわとさわめく。そのさわめきを聞いて、ますます緊張して、あがつてしまつて、何も弾けない。そうしているうちに、「千住真理子はやはり弾けなくなった」とクラシック業界で噂になりました。

噂になつて一年、二年経ちました。二年間のブランクがあつたから、弾き始めて二年間経て

は治るんじゃないかと思って、私は一生懸命に踏んばっていたんですね。それでも毎回毎回弾けない。そうすると、人間は非常に不思議なもので、「弾けないんじゃないかな」という不安がだんだんと変化していった。「弾けないにちがいない」という確信に変わるんですね。どんなに練習しても、自分の頭のどこかに「絶対に弾けない」という自分がすっかりと存在しているんです。そうすると、一日十二時間練習しようが、十四時間練習しようが、また練習でどんなにうまく弾けていようが、ステージの上に入った瞬間に弾けなくなる。これは非常に恐ろしいことでした。

そういう状態になって、さらに一、二年経ちました。ブランクから四年です。ブランク期間の二倍の四年が経ったわけですが、弾けないだろうという確信は日に日に増していくばかりで、「もうこれは音楽の神様が許してくれないんじゃないだろうか。私が二年間バイオリンをやめたという事で、もう二度と、皆さんの前で思うように弾ける以前の私には戻らないんじゃないか」と、私は確信するようになっていました。

四年、五年、まだ戻らない。しかし、私は音楽がとても好きなので、毎日十二時間、十四時間と、練習をがむしゃらにやっていたわけですね。と、七年目のある日、ステージの上でチャイコフスキーの「バイオリンコンチェルト」第一楽章を弾いている途中で、非常に不思議なこと、すべての感覚が突然一瞬で戻ったんですね。これは聴衆の皆さんにはわからなかっただ

ろうと思いますが、私自身はからだ中がぞくぞくっとして、嬉しくて、本当にもう涙が出て、涙を流しながら演奏しました。すべての感覚が一瞬にして戻ったんです。

こういふことがあるとは思いませんでした。徐々に戻るとばかり思っていたので、なぜ戻らないんだろうと思っていたら、すべての感覚が一瞬にして戻った。そのときに私は「もしこれが一瞬だけでなく、ずっと戻っているのであれば、もう一回バイオリンを弾いてもいいと許されたような気がする」と感じました。「もう千住真理子はダメになった」と大評判になった頃でしたが、それでももう一回、評判を覆すような演奏活動をしていきたいと思って、私はひとりで非常に感動し、喜びました。非常に幸いなことに、いまでもその感覚は戻っているのです、こうして演奏会を続けているわけですが、一瞬にして戻ったものですから、ひょっとしてまたいつの日か一瞬にして喪うかもしれないという不安も、実はあります。

でもおそらく私がいま弾けるということは、弾いてもいいということなので、弾ける以上は皆さんの前で弾いていきたいと思っていますね。いつの日か一瞬にして弾けなくなったら、今度こそはしがみついてないで、まあ、あっさりバイオリンをやめるべきときだなと思っていますのですが、いまは非常に幸せなことに弾ける状態です。

自分を信じる

今日、私が皆さんにぜひお伝えしたいことは「自分を信じる」ということです。皆さんは自分をどのくらい信じているでしょうか？ 自分の実力や才能、頭脳、可能性などを信じることができるでしょうか？

実はこの「自分を信じる」ということは、簡単なようで、実はとても難しいということを、私はこの七年間の屈折のなかで感じました。たとえば高層ビルの窓から隣のビルの窓にロープを一本渡したとしましょう。このロープの上を綱渡りしろと言われていたようなものだと思うんですね。自分を信じた人には多分それができるのじゃないかと思えます。ロープの上を渡っていて、自分を信じなかったその瞬間に落ちるんじゃないかと思うんですね。たとえばその綱渡りを何百回と練習したとしても、自分を信じるできない人には永遠に渡れないんじゃないかと思えます。

私は、本当にこの七年間のなかで実感しました。「絶対に弾けない」と心のなかの自分が言っているのと同時に、もうひとりの自分は「もう練習は足りている」と言っているわけです。「もう十分に練習した。あとはもう自分が信じられればいい」と。ところが自分を信じようと思つことはできるんですが、本当に信じられるか？ 一〇〇%信じられるか、ということですよ。

本当に一〇〇%信じきれたときに初めて、その人の能力が何倍にもふくれあがっていくんじゃないかと思えます。

じゃあ、どうやって自分を信じられるか？ 私はそれこそが勉強や経験だと思います。多くの勉強をして、多くの教養を身につけて、「こうなったらこうしよう」と、あらゆる場面を想定して、自分が対応できると思ったときに初めて、自分自身を信じることができるようになりましたが、こんなふうにならざるに練習することも必要で、この練習がなければ、結局は自分を信じることもできないのではないでしょうか。

あるいは、自分を信じるだけではなく、自分自身の心を誘導することも大切だと思います。マインドコントロールという言葉が流行ったことがありますよね。オリンピックの選手がマインドコントロールをいい意味で使って、自分自身の心をコントロールするという話を聞いたことがあります。たとえば、夜寝るときに自分が優勝台に立っているイメージをしたり、あるいは野球選手ならホームランを打っているイメージをする。本当に細かくイメージすることができれば、それは成功につながるそうです。そういうことを本で読んだことがあって、この七年間の屈折のときに、自分でもこの方法を実行したことがありました。これだけ練習したんだから、後は自分を信じる工夫だと思って始めたんです。

私の方法は、演奏前に一時間ほど控え室を真っ暗にして、そこで横になって寝ることでした。そして、一生懸命考えるんですね。イメージするんです。ステージ上に出て行って、バイオリンの音を合わせて、弾き始める自分。一音ずつ弾いている自分。その音もだんだんイメージして弾いていきます。でも、このイメージのなかでさえ、難しい箇所になると、私はどうしても間違えてしまうんです。イメージのなかでさえ間違えていてはダメだなと思って、なんとかそれを間違えないようにしながら先に進もうと思うんですが、何回やっても、どうやっても、イメージのなかで間違えてしまうんですね。

それで私は、これは精神的にもっと鍛えなければいけないと思って、バイオリン以外の本を読んだり、いろいろな勉強をしたり、あるいは映画を見たり、なるべくバイオリンから離れたさまざまなことをしました。そしてバイオリンから離れた場所から、今度はそのイメージで弾けるようにしようと思っただけです。そうしてやっていくうちに、イメージのなかでも難しい箇所が弾けるようになって、そしてステージ上でもその部分が実際に弾けるようになってきました。ね。そのときに「やっぱり、そうなんだ」と確信しました。

これは皆さんも何かのときに試してみるといいのではないかと思います。もちろん努力や練習は非常に大切です。でも、練習だけではなく、努力だけではなく、それ以外に精神的な自分自身を節したり、自分の心を誘導するということは非常に大切なことだと思えます。

このやり方は私のクセになりました。いまでも演奏会の前の三十分間は、部屋を真っ暗にして横になって寝るんですね。そして、いまではイメージの中で曲を実際の演奏よりもゆっくりと弾きます。ゆっくりと弾くと必ず弾ける。だからゆっくり弾く。ステージの上でゆっくり弾いて、いい演奏をするというイメージを本番前の三十分間にします。そして自信を持ってステージに出て行くと、自分自身が非常にリラックスして、いい演奏ができる成功率が最近は高くなりました。

心を伝える

もちろん音楽以外でも言えることだと思いますが、音楽というものは、その人の心を反映するものだと思います。私の演奏会に子どもを連れていらしたお母さんが、演奏会の後、私のところに質問にいらっしゃいます。「この子はどうもバイオリンを弾くのがイヤで、練習が嫌いだと言っていますが、どうしたらいいでしょう?」という質問に、私は「嫌いならば、すぐにやめさせたほうがいい」と答えます。すると、そのお母さまは非常に怪訝な顔をしてお帰りになってしまつのですが、本当に私は心からそう思つんですね。

先ほどの研究の結果ではないですが、イヤだなと思って音楽をやっていると、そのイヤだな

という気持ちで聴いている相手にやはり伝わるんですね。そうすると、クラシック音楽は何となく難しくイヤなものというイメージがまた人に伝わってしまう。そうではなくて、その人が気持ちよく楽しく弾いていると、その楽しい気持ちは聞き手に本当に伝わるものだと思います。

いまから五年前に、NHKの「趣味悠々」という番組を担当しました。アマチュアの人にバイオリンを教えるという番組でした。番組をスタートする前に、出演者の方のオーディションをしたんです。アマチュアのバイオリンを弾く人から十人を選ぶというオーディションには、約百人の人がいらっしました。この百人の人のなかには、非常に小さな子どもたちもいれば、ご年輩の方は九十歳ぐらいの方まで、いろいろな方がいました。

そのなかのおひとり、七十歳代の男性の方に順番が回ってきたら、その方はとても嬉しそうに私の前に立って、バイオリンを構えて、弾き始めたんですね。何を弾いているのか、よくわからないんです。でも、非常に気持ちよさそうに、嬉しそうに、幸せそうに、一生懸命に弾いている。おそらく何か名曲だろうと思っただけですが、音程が定まっていなくて、何の曲なのかよくわかりません。そして、どうも弾き終わったらしく、弓を置かれたので、「何の曲でしたっけ?」と聞きましたら、「タイスの瞑想曲です」とおっしゃったんですね。「あー、そうでしたね」というように受け答えしたんですが、私はそのときに気がついたんです。その方が非常に楽しそうに演奏していたので、その演奏の一分半ぐらいの時間を私は心から楽しんで過ごす

ことができたんです。メロディーがちゃんとしていなくても、何か伝わるものって本当にあるんですね。

私はこれは非常に大切なことだと思うんです。こうした人間対人間の交流というのは、たとえば言葉をうまく使ったり、あるいは音楽を正確に演奏したりすることではなくて、「伝えたい」という気持ちが一番大切なんじゃないかなと、その時に思いました。これは音楽だけではありません。どんな仕事にしても、おそらく人と人の交流がなければ、仕事にはならないのではないかと思えます。もちろんサラリーマンになっても、人と人の交流があつてのことだと思えますから、人に何を伝えるかが一番大切なことじゃないかなと思えます。

そういう意味では、音楽を聞くということも感性を磨くひとつの方法ではないかと思うんですね。感性を磨いて、人に伝えたいという思いを強くする。その思いが人と人の潤滑油のような状態になってくれて、人間関係がうまくできていくんじゃないかと、最近では思っております。

そろそろ時間になってきました。質問を受ける前に、最後に一曲だけ演奏したいと思えます（拍手）。

話のなかにもありましたパッハの「G線上のアリア」を演奏したいと思えます。この曲は、私自身のなかでとても大切にしている曲です。G線というのは、バイオリンの弦のなかで一番

低い弦のことです。Gというのはドイツ語ですが、ドレミファの「ソ」の弦のことなんです。つまり「G線上のアリア」というのは、バイオリンの一番低い弦一本だけで演奏されるという旋律なんです。他の三本の弦は一切使わないで演奏されます。それではパツハの「G線上のアリア」を演奏します。

演奏（拍手）

質疑応答

ストラディバリとストラディバリウス

Q 学生A（理工学部一年） はじめまして。先ほど演奏なさったその楽器がストラディバリですか？ ストラディバリとストラディバリウスの違いは何ですか？

A ストラディバリというのはアントニオ・ストラディバリという人の名前で、ストラディバリの作った楽器のことをストラディバリウスと呼びます。

Q いまから楽器を始めても間に合いますか？

A バイオリンですか？ プロになるんですか？

Q まあ、バイオリンを人並みに弾ける程度でいいんですが。

A 大丈夫ですよ。私の知っている方で、たとえば六十歳になってからバイオリンを始めて一年間で、小さな曲を弾けるようになった方はいらっしゃいますし、いまからなら、まだ若いので、だいたい弾けるようになりますよ。

Q バイオリンは一挺いくらするんですか？

A 安いバイオリンなら、中国製で三万円ぐらいからあります。

基本的な心構え

Q 学生B（理工学部四年） 本日は生の演奏が聴けて、とても感動しております。自分も小さい頃からバイオリンをやっております、趣味程度で時々弾くのですが、そのたびに演奏が少しずつ違っていると感じています。千住さんは年に数十回以上もコンサートをされるわけですが、どういうことをふだん心がけていらっしゃいますか？ ステージに立つときや、ポランテアに行くときなど、おそらく少しずつテンション(28)なども違うと思うのですが、何かこれだけは変わらないという基本のようなものがあれば教えていただきたいと思えます。

A 私が人前で弾くときの基本は、やはり私が二十一歳のときに出会ったホスピスでの患者さんとのことです。私がお会いした一週間後にその方が亡くなったと聞いたときから、いつも思うようになったんですね、たとえばコンサートがあるとします。今日、この聴衆のなかに、初めて私の演奏を聴きに来て、そしてもう二度と聴きに来ない人がいるかもしれない。つまり一期一会ですね。この一期一会の気持ちが芽生えて、もう二度と私の生の演奏を聴いてもらえないかもしれないと思つたときに、何だか心がとても神聖になるわけです。いつもそういうことを感じるようにしないと、やはりプロとしてやっていると、年間百十回ほど演奏会がありますので、下手をすると非常にだらけたことになってしまふ。ですから、毎回自分で自分の心を感動させ、リフレッシュさせようと思えます。そういうふうに、今日が初めてで最後の人がいるかもしれないと思つた瞬間に、自分自身が生まれ変わりますね。

音へのこだわり

Q 学生C（文学部一年） 中学のときに握手をしていただいたことがあるので、思わぬ形での再会ができて嬉しく思っています。千住さんは感動を伝えたい、気持ちを伝えたいとおっしゃっていましたが、その手段が音楽であることにこだわを持っていらっしゃるのでしょうか？ 千

住さんのご兄弟はそれぞれ芸術家ですが、お兄さんたちの選んだ芸術分野をどうご覧になっていますか？ 音楽以外にも感動を伝える方法はいろいろあると思うのですが、それが音楽であることにこだわりをもっていらっしゃるのでしょうか？

A 私には兄が二人います、ひとり日本画家、もうひとは作曲家です。兄貴たちの創作活動を見ていて、それはそれで非常にすばらしい魅力的な世界だと思うことはあります。しかし、これは非常に運命的なことでもあるんですが、私自身は二歳三カ月からバイオリンを始めましたこともあり、実は言葉よりもバイオリンで、つまり音で表現したほうが表現しやすい、そういう自分自身になっていることも間違いないですね。ですから、反対に言えば、言葉ってとても難しいと思うんですね。たとえば「美しい」と言ったら、その「美しい」という日本語の基準に狭められてしまう。「美しい」と言っても、もっと違う意味での「美しい」があるはずなのに、みんな一定の基準にはめられてしまって、実は豊かな表現ができてないのではないかと、私はいつもむずがゆく思っているんです。言葉で何かを表現することは非常に難しいといつも思っています。そういう意味では、音のほうが表現しやすい。自分の魂から自分で出した音には、表現したいことがにじみ出ると私は信じていて、その音であれば、皆さんに私が思っていることが伝わるのではないかと思うんですね。そういう意味で、おそらく私は自分自身の命がある限り、音にこだわって、音によって自分を表現し、自分が生きているということをも

分で再確認していくのではないかと思えます。

バイオリニストにならなかつたら

Q 学生D（理工学部一年） 話の趣向が少し変わってしまったかもしれませんが、千住さんはバイオリンをやめたときに、バイオリニストの替わりに将来何になろうと思っていらっしゃいましたか？

A 実はバイオリンをやめようと決心したときに、何になろうかと思ひまして、ずいぶん悩みました。友だちがちょうどコンピュータをやるとか、スチュワートになるとかいるいると言っていましたし、あるいは語学の勉強をしてアメリカの学校の先生になりたいと言って、実際になった人もいます。みんな女の子ですが、そういう友だちの間で、私自身も、バイオリンをやめたから、じゃあ何をやるうかと思つて、いろいろな勉強をしたんですね。いまから父のやっていた理工系のことは自分自身で勉強できない。文学部に進んでしまつたし、理工学部に移ることは非常に難しいし、私には無理だということもわかつていたのですが、しかし、そういう考えも一瞬間の中をよぎりました。あるときには、お料理研究家になろうとして、三人ぐらいの、当時流行っていた料理研究家のお宅を実際に訪ねて、その家で月に三、四回お料理を習

ったこともあります。しかし、これも非常に興が深い世界でした。本当にやりたかったら留学をしなければならぬなど、なかなかたいへんで、そこまでの情熱が私自身のなかになかったわけです。いろいろなことをやるうとは思ってはやめました。そして、結局頭のなかでいろいろと考えていくうちに、すべてのことがバイオリンにつながっていく。私にとってバイオリンがやはり自分の一番やりたいことなんだということに結集されていったんですね。

心の雑音はどう消す？

Q 学生E（理工学部一年） NHKの研究所でなさった研究で、自分がテーマをもって決めて弾いても、深層心理が聴衆に伝わってしまうというお話がありました。たとえば、コンサートなど本番の演奏の歳に心がイライラしていることもあると思いますが、そういう心の内側はどうやって消して、演奏に向かっていらっしゃるのでしょうか？

A そのことが、私にとって、あるいは演奏家にとっては一番大切なことだと、私は思っています。演奏会の前に、もちろん音合わせといって、ピアノと一緒にリハーサルをしたりするのですが、それだけではなく、私は演奏会前の一時間を、言ってみれば瞑想の時間のようにして、とても大切にしているんですね。この瞑想の時間で自分自身をまず落ち着かせる。そして、音

案が好きだという原点をなるべく思い出すようにするんです。なぜ音楽をもう一度手に取ったのだろうか。そんなことをもう一回思い出すことによって、「ああ、私が一番大切にしたいのは、心なんだ。感動なんだ」ということに再度気がつくことができます。そのことに気がついて、自分の原点に戻れてこそ、初めて私は演奏できる状態になるのだと思っているので、そういうふうになかなかならないときもあって、そのときにはものすごく苦しみます。どうしてもならないときもあるんですね。気持ちのならないときでも自分をのせて弾かなければ演奏会になりません。ですからそういうときには、開演時間を五分、あるいは十分遅らせても、お客様に待っていただいて、それまでに自分の心を誘導して、なるべく自分で意欲を持てる状態にしています。この方法は、やり始めた当初は非常に難しかったのですが、慣れてくると、いまでは三十分あれば、だいたい自分を落ち着かせることができるようになりますので、自分自身をコントロールすることは可能だと思っています。

一流人の資質

Q 学生F（理工学研究科修士二年） 今日貴重なお話を聞かせいただきありがとうございます。ございました。千住さんは間違いなく世界のトップクラスの音楽家だと、私は認識しています。最

高の音楽を常に持続的に人々の前で演奏することは、プロとしては使命だと思えますが、他のプロの方々を見てみて、どういう部分が「あの人の、ああいう部分がプロだな」とか、「自分にはこういう部分がまだないな」と思われますか？ また、音楽の世界だけでなく、ビジネスマンなどの業界の人を見て、やはり一流になる人というのは、どういう素質や資質なり、あるいはバックグラウンドを持っている人が多いと思われますか？

A 私は、いろいろな雑誌で対談したりして、まったく違う分野の方と話をしたりすることが多いんです。そのなかにはビジネスマンの方ももちろんたくさんいらっしゃいます。そのときに一番思ったのは、トップに立っていらっしゃる方というのは、ものすごく勤がさえているんですね。勤と言うのは……、何と言ったらいいでしょうか、たとえば音楽を聞くことは一般的に非常に趣味的なことだと思われるかもしれない。しかしあるそういう人たちと対談をしたときに思ったのは、そういう方々がクラシック音楽を一種の道具として扱っていらっしゃるということなんです。それはどういうことかと言うと、自分の勤を磨く道具なんです。その方と対談のなかで非常に印象に残っている話のひとつに、「ビジネスチャンスをつかまえるための感性を磨くことが非常に長けていると自分でも思う」というのがあります。このチャンスをつかむというのは、私たちにもあるし、ビジネスマンにもあるし、あるいはまったく違う職業の方にもあると思えますが、「あ、いまがチャンスだ」と思ったその瞬間を逃さない。それはや

はり一種の感性だと思っんですね。そして、ある分野にも長けた方、あるいは第一線で活躍なさっている方には一種の勘がありますね。お話をすると、よくわかります。これが私が音楽以外の方のなかに見つけたことです。

それから、音楽の分野も含めて、自分になくて相手にあるものは、たくさんあります。ある時期には、それをものすごくうらやましいと思って見たりしていましたが、私の場合は、他人の長所に目を向けてしまうと、自分自身を伸ばす力が失せるんですね。ですから、自分の長所を伸ばすために、人の長所を見つけて自分の短所を振り返るのではないんです。自分の長所を伸ばすためには、人の長所は放っておいて、自分の長所だけを見つけて伸ばす。これが私流の自分自身の伸ばし方ですね。

届けたい音は届いている？

Q 理工学部研究員 私もちよっと音楽をかじっているのですが、自分の届けたい音というのがお客さんに届いてはいないのでないかと、よく不安になります。千住さんはそういうふうな、自分がこういう音を届けたいんだと思っっていることが一〇〇%届いていないのではないかと不安になることはありませんか？

A その不安になっていた時期がちょうど大学の頃ですね。それで研究をしていたり、卒論を書いていた。その頃の私は、いまおっしゃったように、自分が伝えたいことが相手には伝わっているのだろうかというよりも、むしろ伝わっていないに違いないと強く思っていました。しかし、いまは逆に「自分が伝えたいことは確実に伝えるんだ！」という気持ちがありました。だと思います。伝わっていないんじゃないかなと思うと、やはり伝えるエネルギーが弱くなるんですね。ですから、伝わっているに違いないというよりも、「伝えるんだ。どうしても伝えたい！」という思いを全部エネルギーにしたほうがいいと思って、いまはそういうふうにしています。

ブランク後の練習

Q 学生G（文学部四年） 今日はお話と演奏をありがとうございました。千住さんは二十歳の頃にバイオリンをやめて、その後ブランクを経て、練習を再開なさったとのことでした。ブランク以前の練習は天才らしい弾き方ということでメカニク的な練習をなさっていたと思うんですが、ブランクを経て、練習に対する考えや方法、姿勢など変わったことがありましたら、教えていただきたいと思います。

A ティーンエイジャーの頃は、自分の四畳半の部屋で、日々十二時間以上練習することが私の音楽のすべてでした。しかし二十歳を境に、音楽というのはその四畳半で練習しただけでは、とてもじゃないけれど表現しきれない、あるいは勉強しきれないものがあるということに気がつき始めたわけですね。そのひとつが感動であり、あるいは伝えたい何か強いメッセージであったり、人間性など、いろいろなものだったわけです。私はこういうふうに思うんですね。技術は一〇〇%マスターすることができるわけです。だれでも努力して磨けば、まあある程度一〇〇%できるようになります。しかし、それ以上ということがないんですね、技術には。しかし、内容であり、芸術ということになると、これはもう一〇〇%ということがあり得ません。どこまでもどこまでも果てしがない。その人間が成長すれば成長したような形に、良くも悪くもいるいろいろな形に変わっていったり、いろいろな深さになっていったり、幅も増えたり、大きさも大きくなったり、いろいろな可能性が出てくるんです。そういったときに、じゃあ、練習はどうしようということになります。やはりこの一〇〇%の技術は絶対に必要なんです。これが「まあ、いいや。苦労してちよっと人間性も深まっただろうから、技術が八〇%ぐらいでもいいんじゃないの」とやっていると、その増えた幅のほうも生きなくなってしまうんですね。絶対にダメなんです。この一〇〇%の技術は絶対になくってはならないんです。だからそのためのトレーニングは仕方がないことなんですよ。毎日の練習は不可欠です。これはプロであ

れば、絶対に必要です。これがアマチュアだったらどうでもいいんですね。一〇〇%の技術をもって表現しなくても、まあ、場合によっては人に伝わっていなくても、自分ひとりが人間性でもって音楽を味わっていいわけですが、人に探取的に絶対に伝えたいメッセージがある場合には、一〇〇%の技術を保つための訓練は絶対に必要です。

苦しい練習を支えるモチベーション

Q 学生H（文学部一年） 今日感動しました。千住さんが挫折しても、すごく苦しい思いをしても、毎日十二時間も十四時間も練習できる、そのモチベーションは何なのでしょう？

A それが私の伝えたい思い、メッセージなんです。じゃあ、「何を伝えたいの？」と言うと、それはやはりホスピスのときに感じた感動です。そのときに私は全然弾けませんでした。その患者さんおひとりの前で演奏したわけではなくて、他の患者さんたちも二十人ぐらいいらっしやっただんですが、そのときに感じたのは、完璧な演奏をだれも望んでいなかったということなんです。つまり私が「天才少女」と呼ばれたティーンエイジャーの頃には、ステージに立つと、聴衆は明らかに完璧な演奏や天才らしい演奏を望んでいたのに、ホスピスなどボランティアに行ったときに、皆さんが望んでいるのはそういう驚かす演奏ではなくて、人の

体温が感じられる音なんです。つまり、それが感動できる音楽だということに私は気がつきました。そのときに、「これを伝えたいんだ」「音楽はこれなんだ」と思ったわけです。もう人を驚かせることはない。そうではなくて、たとえば演奏したことによって、ものすごく心が傷ついている人が「ちよつと慰められた」と言ってくれば、こんな幸せはないわけです。それが私にとっての音楽なわけですね。それをやりたいという気持ちがあるものすごく強く生まれてきたので、やはり七年もかかって、弾けるようになりたいと思いつけることができました。

海外での交流

Q 学生Ⅰ（経済学部一年） 今日貴重なお話と演奏をありがとうございました。自分は小さい頃から海外で過ごしていて、チェロとピアノをやっていたんですが、千住さんが海外に演奏に行かれて、現地の方と音楽を通じて交流なさったことはありましたでしょうか？

A いや、本当に海外に行くと、「言葉が必要ない」ということがよくわかるんですね。お互いが演奏家の場合は、お互いが演奏することによって、もう一瞬にして打ち解けることができます。また、演奏家同士だけじゃないんですよ。私が一番びっくりしたのは、イタリヤに行ったときのことで。ステージに出て、ふっと客席のお客様を見ると、演奏も始まっていないの

にすでに大フィーバーしているんですね。「ブラビシッモ！」とか言っている。顔が真っ赤になっていて、まあ半分酔っぱらいじゃないかなと思う場面もあったのですが、とにかく聴衆のほうで、クラシック音楽をとにかく楽しくしようと思っっているんですよ。イタリア人って、演奏家をつまくのせて、つまく弾かせたほうが自分たちが楽しめるといふことをよく知っていて、演奏家をその気にさせるのが非常にうまいんだなあと思いました。ですから、そういう意味ではヨーロッパに行くたびに、そういう状況にいつも感謝しています。日本の聴衆の方って非常に真面目なんです。お行儀良く、しーんとしてまして、拍手をすべきところできちんとして、パツとこつやめるんです。それはとてもいいことなんです。ある意味ではよくないなとも思います。非常に残念。もっと自由に、もう拍手したときには、曲の途中であろうが何であろうがしちゃう、というようなことがあってもいいんじゃないかなと、私は思うぐらいなんです。

スポーツの「ゾーン」のような瞬間

Q 学生J（理工学研究科修士一年） 今日はずばらしい演奏とお話をありがとうございました。抽象的な質問になってしまっって申し訳ないのですが、私はどちらかというと音楽よりもス

ポーツをしている人間です。先ほどからお話になっているような集中力の高まった状態はスポーツのなかでもありまして、いわゆる「ゾーン」と呼ばれています。たとえば、ゴルフアーなからカップと自分しか見えないような、観客を遮断したような空間があるそうです。今日、千住さんのお話を聞いていまして、心を伝えることは観客を抜いては成り立たちませんし、いわゆる集中した状態ではスポーツとはまったく違う状態を味わっていらっしやると思うのですが、どのような景色を見ていらっしやるのか、そこらへんをお教えください。

A 非常にスポーツと似ているんです。「ゾーン」ということは私は知らなかったのですが、よくわからないのですが、よく野球選手で球がスローモーションで見えるという方がいらしゃいます。音楽にもそれがあるんですね。ものすごく早い難しい部分を弾いているはずなのに、自身はものすごくスローモーションでゆっくり弾いていると感じているんです。ところが後でテレビ映像を見たり、録音したものを聞いたりすると、ビックリするほどのものすごく早く弾いていたりする。そういうときに、私はやはり非常に集中している状態だと自分で見つけることができますね。また、非常に集中している状態のときには、聴衆は必ず意識のなかにありながらも、その聴衆がちょっと離れた状態でいて、私は「真空」という言葉を使いたいんですが、その空気のない真空状態のなかに入ったような、自分と音との非常に密な関係が生まれる、そういう時間があるんですね。そういう時間が生まれたとき、つまり真空状態に入ったなとい

うときには、非常に集中した演奏ができます。